

1人1台端末の利活用に係る計画

令和7年3月 滋賀県近江八幡市

①1人1台端末をはじめとするICT環境によって実現を目指す学びの姿

我が国が目指すべき未来社会として Society5.0 が提唱された。人工知能(AI)、ビッグデータ、Internet of Things(IoT)、ロボティクス等の先端技術が高度化してあらゆる産業や社会生活に取り入れられ、社会のあり方そのものがこれまでとは劇的に変わりつつあり、予測困難な時代(VUCAの時代)を迎えている。

このような中で、本市では「自らが課題を発見・設定したうえで課題を解決してく力」を育成し、激しく変化し続ける社会の中でも夢や志を捨てず持ち続け、学んだことを社会や人生に生かしきり、これからの時代を生き抜くことができる子どもの育成を図る。

ア. 自らが課題を発見・設定する

課題発見や自己調整のために、児童生徒が自らICTや学習支援ソフト等のツールを選択して駆使する。

イ. 課題を解決する

ICTを活用し、他者と協働して主体的に学ぶことで、多様な情報や異なる視点を知り、課題解決に取り組む。

②GIGA第1期の総括

本市は、「近江八幡市小中学校ICT教育・整備方針」を策定し、平成29年度から5年にわたり、段階的にコンピュータ教室やデジタル教科書、電子黒板などのICT機器の整備を進めてきた。令和2年度には、小学校にiPad、中学校にChromebookを整備した。iPadはICT機器を初めて使用する小学生に対して直感的な活用ができること、中学校にChromebookについては、高校や社会人活動を視野に入れタイピング等をキーボードにて実施することに慣れることなどを目的に整備し、協働学習の時間をはじめ学校生活の様々な場面の中で、情報収集・理解・発信・共有のツールとして活用し、令和6年度からはAIドリルを導入し、端末の持ち帰りの促進を図ることで、端末利用の向上と協働的な学びの推進、個別最適な学びを進めることができた。

③1人1台端末の利活用方策

ア. 個別最適な学びと協働的な学びの一層の充実

児童生徒が学習について自己調整し、自ら学ぶ手段や方法を選択できるよう、各校に配備したメンバーで構成したICT推進リーダー部会を中心として複線型学習について研究を進める。端末活用がスタディ・ログにもなるため、児童生徒は自分の学習状況のデータを参照し、次の学びにつなげることができ、個別最適な学習をさらに推進する。

また、小中学校に統一した授業支援システムを導入することで協働学習の実践事例を共有する。共有のためにICT支援員(外部委託)との連携を密にし、教職員を対象とした研修会を積極的に実施する。

イ. 児童生徒の一人ひとりの学びの保証

授業支援システムやウェブ会議システムを活用したオンライン授業を配信して、学校内の他教室や学校外をつなぎ、さまざまな事情で教室で学ぶことができない児童生徒に対して学習機会を提供できるよう、外国籍等の児童生徒については母語支援を行いながら学習できるよう、誰一人取り残さない学習環境を整備する。

また、心の健康観察については、令和7年度からの導入を検討し、児童生徒の心の状態の把握に努め、指導やケアに活用する。